

齋藤 孝著 『読書力』

いずみ学力研 金井 敏之

読書の効用

ほくのおすすめの本は、岩波新書齋藤孝著「読書力」である。齋藤孝さんは、あの「声」出して読みたい日本語の齋藤さんである。「読書力」を読んで、眠っていた(?) 読書意欲が湧いてきた。齋藤さんは読書の効用をこうあげている。

ひとつは、自己形成の糧。つまり自分をよく育てる方法であるという。彼によると、1980年代以降は、読書によるまじめな自己形成を軽んじる傾向が加速し、楽しければそれでいいという風潮がはびこってきた。その中で見失われた自己形成のプロセスは、危うい宗教団体に求められたという。

オウム真理教事件のときに、優秀な理系のエリートたちが数多く入信したのは、彼らのある種の自己形成の問題を、思春期から青年期にかけて棚上げしてきたツケを、

一気に神秘主義を通して払おうとしたのではないかと齋藤さんは考える。読書についても幅広く読み続けていけば、オウム真理教の教義などは相対化できるはずである。

読書の幅が狭いと、一つのことを絶対視するようになる。教養があるというよりは、幅広い読書をし、総合的な判断を下すことができることだ。目の前の一つの神秘すべて心を奪われ、冷静な判断ができなくなる者は、知性や教養があるとは言えないと齋藤さんは言う。

ふたつめは、読書はコミュニケーション力の基礎になるという。読書をするコミュニケーション力が高段にアップするのだ。ふつこの会話をしているも、読書力のある人とならない人では、会話の質が変わってくる。学生を相手に会話をしている本を読んでいる学生がそうでないかはすべしわかると思う。

読書をしているかどうかは、会話に脈絡があるかどうかでわかるという。相手の言ったこととまったく別の、自分だけに關心のある話をしたら、相手はうんざりしてきて人格さえも疑うようになる。相手の要点をつかみ、その要点を引き受けて自分の角度で切り返すこと、人の話には幹と枝葉があり相手の会話の幹を押さえて、それを伸ばすのが会話の王道である。その幹をつかまえる力は、読書を通じて要約力を鍛えることにより、格段に向上すると齋藤さんは主張する。

読書力とは

読書力とは何か。齋藤さんは「読書が苦にならない日常で何気なくできる力」と定義する。彼の設定する読書力のラインは文庫100冊・新書の10冊を読んだ」というラインである。文庫本といっても、小学生でも読める星新一のショートショートのような読み物は除き、司馬遼太郎の小説あたりが境界線だった。そして、その有効期限は4年という。

そのラインをクリアすると、その人が話す内容を聞いていても、明確な説得力が

あるはずだし、一定レベル以上の知力や教養が感じられる。逆に、まったくそれが表に出てないものが「振る舞うのは、むしろ難しいこと」。

教師という仕事柄、ぼくは本を読む。かつて月一〇冊ペースで本を読んだこともある。夏休みは二〇冊前後の本を読む。しかし、その多くは教育書であるし、自己啓発の本も多い。齋藤さんのいう一定レベルの文庫本は、あまり読んでいない。

人と話していて、ぼくの話に明確さや説得力がないのは、きっと読書のレベルが低いことと、読む本に偏りがあるからなのだろう。

やはり、齋藤さんという。本を自分で書くくらいレベルにある人間は、当然読書習慣を持っているはずだ。少なくとも、ある時期に大量に本を読まなければ、著作活動を維持するのは難しい。書くことは読むことの氷山の一角だと。彼は自分の思考力の重要な部分を、読書経験に負っていることを、はっきりと感じているようだ。

彼の文章を読んで、ぼくはびしょとてっとうとした。ぼく程度の「読書力」で本や学力

研の広場の原稿を書いていいのかという恐れである。新任の年の3学期以来、学力研(当時は落ち研)に関わり、多くのことを教えてもらい、レポートも数多く書いてきた。そのお陰で、原稿執筆という仕事をいただくことがある。しかし、それはぼくが学力研サークルのメンバーであるからであり、ぼくに本を書ける実力がいたからではない。

学力研サークルに関わり「書くこと」を教師人生の一部にしようと決心したぼくは、読者に責任を持ち、自分にも納得がいく文章を書きたいと思う。そのため、文章のレベルを上げたい。そのひとつの手立てが読書である。

齋藤さんの本を読んだのを機会に、文庫本100冊新書50冊に挑戦しようと決意した。期限は4年。月に文庫本2冊、新書1冊のペースで読めばいい。

そう考えると簡単そうに思えるが、文庫本のレベルは一定以上と言われているし、仕事絡みの教育書も読みながらの月の冊数がある。また、今の意欲が4年続く保証もない。結構苦勞するかもしれない。

読書はスポーツだ

若い頃の話だが、「読書より体験することのほうが大事だ」と職場の先生に言われたことがある。「金井さんは、読書はよくしてるけど…」というわけである。ぼくの教育的力量不足を、読書のせいになされた。齋藤さんはこのことに明確な反論をしている。体験することは、読書することとまったく矛盾しない。読書を通じて、自分の体験の意味が確認されるということなのだ。しかし、ぼくが尊敬する先生には、そんなことは一度も言われたことがない。読書はスポーツだという。それは、読書にはスポーツと同じような上達のプロセスがあり、読書もまた身体的行為であるということだ。きちんとした指導者のもとでトレーニングを積めば、相当な本まで読むことができるということである。

「本は身銭を切って買った」「本は高いか」「線を引いて読む」「音読の効果」など納得できる記述も多い。東北大学の川島隆太教授の脳の研究も、わずかだが紹介されている。みなさんも「読書力」を読んでほしい。きっと読書意欲が高まるはずだ。